



日本文学論の哲学

— 日本文学人生劇場 —

岡崎公良
新樹社

日本文学論の哲学

—日本文学人生劇場—

岡崎 弘 良

新 樹 社

著者略歴

1926年 東京に生まれる
1953年 群馬大学学芸学部（哲学専攻）卒業
1960年 京都大学大学院文学研究科博士課程
（哲学専攻）修了
現在 金城学院大学助教授（哲学・倫理学）
愛知県立大学講師（倫理学）
著書 『認識論研究』『社会倫理の研究』
『「倫理・社会」研究ノート』
『社会観としての哲学—社会科学方法論のために—』
『文学論の哲学—「知識人の文学」から国民の文学—へ』
『人生論の哲学—「文学論」から「人生論」へ』

日本文学論の哲学

昭和49年 3月25日印刷
昭和49年 3月30日発行

¥ 1,500

著者 岡崎公良
おか ざき きみ よし
発行者 柚登美枝
印刷 進栄美術巧芸社
製本 本間製本株式会社
発行所 株式会社 新樹社

東京都文京区目白台1丁目23番5号
☎112 電話 03 (941) 2103・振替 東京 55719

序

「文学は時代の子であるのに、なぜ、すぐれた古典文学は時代を越えて、現代の我々につきることのない共感を与えつつけているのであろうか。」

これは「日本文学論の哲学・人生論」である。ここで、私は、日本文学の中から哲学をたずねていこうとする。哲学とは人生への凝視・省察であり、人生論であり、我々がいかに生きるかの問いかけの学問なのである。それで、私は、日本文学の中で我々の人生をたずねてみようと思うのである。

日本の古典文学を、古代より辿って近代に至る前まで読み進めて来てみると、そこに登場して来るのは、人間であり、日本人である我々の祖先の各時代時代の中の人生の姿なのであった。すぐれた古典文学とは、時代の文学であったということ、時代の人生を背負って、時代のさなかから生い立ち、その時代特有の、画期的な文学であったということが我々に実感されよう。文学の背後には時代があり、人生があり、人間の生活が脈動しているのである。

「日本紀^{にほんぎ}などは、たゞ、片そばぞかし」。これは紫式部が『源氏物語』の中で、自分の書き綴^{つづ}っていく、時代の人生表現の物語文学に対する自負の発露なのであった。

ところで、文学においては、この人生はなまのままで表現されてはいない。曲折しているのである。あるいは、このことは何も文学だけに限ったことではないとも言えよう。ころみに思ってもみよう、いったい人生はどのようにして自らをあらわにするのであろうか。人生は表現されはじめて我々の前にあらわとなって来るのである。我々は自分自身の人生さえもそのままには自明なものとして受け留めることはできないのである。ことに、文学は言語による表現芸術なのであって、この表現にはそれぞれの様式があり、それぞれの様式は各時代の中で、伝統地盤の上に培^{つちか}われて来たものなのである。

従って、我々が古典文学の中からそれぞれの時代の人生を受け留めようとするとき、ここには何らかの文学論・文学方法論が必要とされて来るのではなからうか。私は、この文学方法論を、哲学・人生論の道からたずねてみたいと思うのである。古典文学と人生論とは密接な連関関係をもっている。我々の、古典文学に対する、時代を越え、環境を越えての共感感情のなぞは、この中に秘められているのではなからうか。すぐれた古典文学は時代の人生を、曲折しつつも、生と色濃く投影している文学なのであろう。私はこのことを、「日本文学論」としてたずねてい

こうと思う。

だが、更に、この「日本文学論の哲学」は一つの人生劇ともなつて展開しよう、題して、「日本文学人生劇場」。そして、そのいかめしい表題と、この転合・戯作てんごうげきのような副題とは、必ずしも矛盾するものではなからう。なぜなら、人生の表現・内容の深さと娯楽性・面白さとは、共に文学にとっては、変ることのない、相即不離の課題なのであるから。面白くても内容の深いものはあろうし、また、むずかしくても内容の深くないものもあろう。ただ、この「日本文学人生劇場」には、座付作者がいささか世話物狂言に不得手なので、いきおい時代物的な大立回りを好んで使いたがる欠点がある。何しろ一千五百年ほどにわたる人生劇を一巻物として一日興行で打ち上げたいなどと途方もない座元からの注文なので、いったい、どのくらい大向おおむせうをうならせることができるかどうか、はなはだ心もとない次第である。

だが、私はここで、皆さんが、哲学とはこんなものだったのだろうか、と奇異な戸惑いを感じつつ目をそばだてられ、納得され、そしてところよく受け容れて下さるよう、努力を傾けるつもりである。おそらく皆さんは、この観劇が終えられたあと、いつの間にか、哲学を受けとるだけの読者・受容者の立場から、作者・みずから哲学する人へと変身されていることであろう、「こういう日本文学論なら、もっと華麗な、もっと重厚な、彫りの深い私の日本文学論が展開できる

のではないか」と。そのとき、哲学、日本文学論の哲学・人生論はあなたの中に呱呱こごの声をあげて来たことになる。私はそのときを期待しつつ、この日本文学論の哲学を展開していこう。

さあ、日本文学人生劇の開幕である。それぞれの時代の表現衣装を重々しく身にまとった時代の人生・文学が自分の出番を待ち構えている。あたかも、満帆風ふうをはらんで、――

「熟田津にきたつに船乗りせむと月待てば潮しほもかなひぬ今は漕こぎ出でな」。

一九七四年二月

愛知県小牧市、藤島住宅にて

岡崎 公良

目次

序

序 章 日本文学論研究の方法論 9

第一章 古 事 記 付..日本書紀・風土記 21

第二章 万 葉 集 41

第三章 古今和歌集 付..後拾遺和歌集・千載和歌集 73

第四章 日記・随筆文学 107

土佐日記 かげろふの日記 和泉式部日記 更級日記

紫式部日記 枕草子

第五章 物語文学 168

構想力の論理・虚構論 源氏物語

第六章 説話文学・今昔物語集・宇治拾遺物語 237

第七章	梁塵秘抄	254
第八章	新古今和歌集・山家集 付…良寛	256
第九章	軍記物語…平家物語	269
第十章	中世随筆文学…方丈記・徒然草	293
第十一章	浄瑠璃文学…近松門左衛門	311
第十二章	浮世草子…井原西鶴	343
第十三章	芭蕉・蕪村・一茶	362
終章	日本文学論の哲学	397

日本文学論の哲学

序章 日本文学論研究の方法論

「困難は、ギリシアの芸術と叙事詩とが一定の社会的発展形態にむすびついていることを理解する点にあるのではない。困難は、それがわれわれにたいしても芸術的享樂をあたえ、またある点では規範として、そして、到達しにくい模範として通用することである。」（カール・マルクス、『経済学批判』、「一般的序説」）

文学・芸術は歴史的社會生活機構の現実の土台の上に成り立つイデオロギー（意識の論理形態）であることは間違いないのだが、なぜ、古い時代の文学・芸術作品のうちでいまなお我々に深い感動を与えるものがあるのだろうか。

「古典」とは、古くていまなお新しい価値をとどめている文学・芸術作品、であろう。そして、「伝統」とは、単に過去にあっただけのものではなく、現在につながりをもったものでなけ

ればならない。ところで、我々日本の現代は、この伝統が無力化しつつあるとき、と言えよう。すなわち、我々が日本の歴史を振り返ってみるとき、そこにいかなる現代とのかかわりを見出すことができるであろうか。

私はここに現代における我々の人生を思う。そして、文学を思う。文学とは言語表現の芸術であり、そしてこの文学の中には言語によって、各時代、各個人のそれぞれの人生が表現されている。私はここに文学と人生との関わりを思う。私はここで、日本の古典文学と現代の我々の人生とのつながりを考えていきたい、すなわち、文学にもとづいての現代日本文化論、現代日本のエートス（生活倫理）の探究の試みなのである。

たしかに、我々が日本の文学の古典を読むとき、それら文学の書きつづられたそれぞれの時代のただなかから、時代を越え生活環境を越えて我々に共感をもって迫って来る文学作品がある。いったい、このような、時代を越えた我々の共感感情とは何なのであろうか。私はここに、文学の面白さと、そしてまたその困難とを思う。

そして、このことは、我々の過去の歴史への理解にもつながっていく。たしかに、我々日本人の過去の歴史、それは現代からみるならば、歴史的な幼年・少年時代であり、「未発展の社会段階」ではあったであろう。だが、現代の我々日本人がこの未熟な社会的諸条件を経過していま

に辿って来たことを思うとき、我々日本人の成長過程の過去の一こま一こまの中にそれぞれの郷愁、つきせぬ魅力を見出すこともありうるであろう。あるいは、我々にとっての過去の歴史、文学は我々の祖先の苦痛の叫び、うめき声、声をころしたしのび泣きでもあったのかも知れない。だが、私は、たとえしのび泣きであつたとしても、そのしのび泣きを聞きわけて、その苦しみ、悲しみの意味を理解し、更に共苦したいと思う、なぜなら、我々にとっては、文学も歴史もそして哲学もともに、我々の喜び悲しみと共に付れ添い、生きるうたを奏で、我々に生きる勇気を与えるものであろうから、である。我々は、二度と悲しいことを経験しないためには、民族の悲しみの表現からも目をおおふことは許されないはずなのである。

私がこのような、「日本文学論の哲学」をころざした動機というものは、私が日本文学の古典を読んでいって、その中に我々日本人の祖先の声をころしたしのび泣きの悲歌に聞き入ったからなのであった。——ああ、だが、私は喜びのうたも発見したいのだが、——。我々の祖先をとりまく歴史的環境地盤が暗く、貧寒としていれば、その地盤に制約され、抑圧されてみずからの人生をおくり、そしてその人生を表現すべき文学も暗く、停滞し、とまどっているのは当然の帰結なのであろう。

伝統も、古典も、現代の我々とのつながりの場において成立できる生活倫理（エートス）であり、そしてその生活倫理の文学・芸術なのである。だが、はたして、現代において我々の伝統は無力化しつつあるのだろうか。問題は個と個との対応関係ではないのである。個々の古典と個々の現代における個人との、そのような伝統の連続、非連続ではないのである。個人個人の伝統への対応、古典への共感問題をここで問うのではない。ここでは、各歴史的な時代とその時代に成立した文学との対応関係、そして更に、その古典文学と現代における我々との対応・共感問題を問いかけていこうとするのである。この「日本文学論の哲学」とは、個々の時代の古典文学の作品解釈論を行なおうとするものではなくて、作家論、作家の人生論をたずねていこうとするものである。そして、それを通して、古典文学の作家の人生論と現代における我々個々人の人生論との対応関係、すなわち、それを古典文学に対する我々の共感問題としてたずねていきたいと思うのである。哲学・思想とは、歴史的社会的現実の中に生きる各個々の人生の探求であり、そしてその各個々の人生の現実生活の土台である社会的地盤、更に、我々の目には可視的ではない社会機構への解明の学問とも言えることができる。そして、古典を現代に生かし、我々日本人の祖先の喜怒哀楽を我々の共感感情の中にもたらしこめることができるもの、それは一に我々一人一人の態度にかかっている。その意味においては、文学も歴史も哲学も我々の人生の前には一つなのであ

る。たしかに、文学に対する捉え方は、我々個々人において異なり、感応も一義的ではない。その意味においては、文学はむずかしくもあり、また面白くもある。ところで、我々にとっては、歴史もまたそうなのである。さて、この文学、歴史のむずかしさというものは、それは我々の人生のむずかしさなのであり、ところでまた、文学、歴史の面白さというもの、それもまた我々の人生の面白さなのであろう。

私は、文学を思い、人生を思い、歴史を思う。私は我々の祖先の経過して来た過去の歴史を思い、現代の我々の人生を思い、そして我々の未来へとひらいて行く歴史の進展を思うのである。

さて、このような「日本文学論の哲学」としての基本的な立場にもとづいて、我々は、「日本文学の古典に対する評価の立場」として、次の六つの視点を理念的に暫定的に出しておこう。

一、日本国家における国民生活倫理の形成の表現としての、日本の倫理思想・文化伝統論に立つての受容の視点。

二、時代を越えた、現代における我々個々人の共感感情によつての、すなわち、近代的個人主義的な場に立つての、ロマン主義的な受容の視点。

三、歴史主義的な理解、すなわち、歴史的社會生活地盤の上に立つての、古典文学・人生の表現

の理解、受容の視点。これは、近代実証歴史学の父、ドイツのレーオポルト・フォン・ランケ（一七九五—一八八六年）の「事柄自体がいかにあったかを理解するために、私は私の自己自身を消し去ってしまいたい」という立場につながる。

次に、このあとの、四、五、六、は発展歴史観の場に立った、一つの共通したものはあるのだが、しかし、個々の立場における視点として違いがある。

四、人間・民族の社会生活の発展史的把握の場に立って、社会生活の発展にともなう個人意識・自我の成長過程の中で古典文学を理解し、受けとっていく立場。たとえば、ヘーゲルの「世界歴史は自由の意識における進歩である」につながった立場。

五、日本文学の古典、およびそれによるそれぞれの時代的環境生活地盤の中での人生の表現というものを、現代の我々の意識の場に立って位置づけ、評価していかうとする立場。そして、この現代の我々の意識の場とは、近代的意識、あるいは近代主義の立場とも言えよう。これは、近代理解社会学の成立者、マックス・ヴェーバーの立場として我々が捉えることができる、「世界歴史は近代化の意識における進歩である」につながった立場と言えよう。

六、近代化そのものを人類の社会生活史の目標とはみなさず、むしろ、近代・現代における資本